Title:「Whatever」

冨田 隆徳
1970年代生まれ
原点に立ち返りながらも先へ進めるように。今回は撮影です。

最近のエントリー

- While My Guitar Gently Weeps (2008.09.11)
- Don't Look Back In Anger (2008.09.08)

アーカイブ

- 2009年03月
- 2009年02月
- 2008年11月
- 2008年10月
- 2008年09月
- 2008年08月
- 2008年07月
- 2008年06月
- 2008年05月
- 2008年04月
- 2008年03月

投稿カレンダー

カテゴリー一覧

ブックマーク

学校法人 日本写真芸術専門学校
NIPPON PHOTOGRAPHY INSTITUTE

OLYMPUS
Your Vision, Our Future

RSS 2.0

Whatever > 2008年09月 アーカイブ

08.09.11

While My Guitar Gently Weeps

Tweet　Check

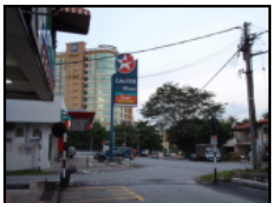
ソウル到着。

ここへきて、終わる気がしなくなってきた。

2年ぶりのソウルを懐かしむ気分でもない。

問題は旧盆の3連休。

頼むから　「人が全然いない」　だけはやめて欲しい…。



カテゴリ：
post by 冨田 隆徳 | 日時: 2008.09.11 | パーマリンク | コメント (2) | トラックバック (0)

08.09.08

Don't Look Back In Anger

Tweet　　Check

一体何から話し始めればいいのやら…　（中村創太風）

ただし初めに断っておくが、中村氏のようなドラマチックな展開も、旅の情緒も、出会いと触れ合いも、そういった類いのものは、僕のこの16日間にはない。一切ない。

そこにあったのは、体に比例して肝っ玉の小さな30男の見るに耐えない堕落ぶりと、それを打ち破る可能性を秘めた小さいけれど大切な一歩と思いたいシンガポールでの最後の2日間だけだ。

スクーリング期間が明けた8月24日。
学校施設から、クアラルンプール中心部の繁華街ブキビンタンのホテルに拠点を移した。

それはもちろん、撮影に集中するためだった。
ホテルを一歩出ればすぐにでも撮影が始められる。そんな贅沢な環境に身を置き、あとはスクーリングで得たことを生かして撮影するのみだった。

ところが。
ここへきて、こんなタイミングでやってきた。
最もヘタレな自分が。

ギアはニュートラルから全く動かず、エンジンに至っては腐って崩れ落ちそうだった。

「体がダルい」
「一番撮りやすい時間帯に毎日スコール」

言い訳でしょ、全部。

体調が良くないのなら、割り切って1日でも2日でもしっかり休んでから動き出せば良い。
雨が降るなら屋根の下で撮ればいい。暗いならストロボを使えばいい。

やってもいないのに、「撮れなかった」なんてセリフはあり得ない。

9月2日。
バスでシンガポールへ向かう。

車中で気を失うように眠っても、やはり体調がすぐれないのは事実だったと思う。

翌日は一日中休養にあてた。
その次の日、機材を持って出掛けるも、カメラを鞄から取り出すことすら出来ない最低の自分と再び顔を合わせた。

"あとがない"

もうその言葉しか浮かばない。

クアラルンプールから送ったネガと撮影済フィルムは、東京の税関で止まったままだった。
もし仮に（そんな事はないけど）、送ったネガとフィルムが消えれば、僕はこの５ヶ月間何もしていなかったことになる。写真を人に見せられないのなら、フィールドワークに行かなかったに等しい。そんなことまで考え始めていた。

９月５日。オーチャード・ロード。
怖くて仕方がなくて、もうやめたいと心の中で思いながら無理矢理シャッターを切り続けた。
８月８日、北京での撮影以来ようやく一日の撮影フィルムが10本を超えた。

９月６日。ブギス・ジャンクション周辺。
前日無理矢理にでもシャッターを押したことが、この日、潤滑油となって僕の体とカメラとそれを持つ両手に流れ込んできた。急激にエンジンが回転数を上げ、ギアがいつものように噛み合った。

頭の中が透明になったようだった。

恐怖感は薄れ、雑念は消え失せ、ただただ頭の中のスクリーンにモノクロのイメージが映し出されていく。次々と。スライドショーのように。

それを現実化させるべく、いや、僕のイメージなんかよりずっと面白い目の前で繰り広げられるリアルな世界を映像化するべく、あとはぶつかっていくだけだ。

９月７日。オーチャード・ロード。
この日の1本目の最初の１カット。
真っ正面からぶつかっていく。当たり負けはしなかった。

撮影を終える時、今までに何度か味わうことのできたあの感覚が降りてきた。
言葉にすれば、充実感なんていうありふれた言葉に変わってしまうけど、あの感覚をもう一度も感じることなく日本に戻ることにならずにすんで、少しだけホッとした

感じることなく日本に戻ることになるのかもしれない、少しだけホッとした。

使えるカットがあるかどうかは現像するまでわからない。
撮ってる自分はやれたつもりでも、選ぶ自分は冷静でなければいけない。

それでも。

長々とこんな事をブログで書く気になったのは、"最低な自分も、そこから抜け出そうとあがいた自分も、確かに存在した"ということを忘れないため。

そして、最後に待ち受ける「２年越しリベンジatソウル」に向け、それなりのプレッシャーを自分に与える意味も込めて。

創太君。
『やれば必ず状況は変わって行く』
確かに。

最後になりましたが、
宙さん、ありがとうです。

カテゴリ：
post by 冨田 隆徳 | 日時: 2008.09.08 | パーマリンク | コメント (2) | トラックバック (0)

Copyright 2008 All rights reserved NIPPON PHOTOGRAPHY INSTITUTE
powered by OLYMPUS